

加賀の青木木米と龔米の作品

美多哲夫

石川県金沢市在住・日本龔史学会運営委員



はじめに

青木木米（龔米）が加賀・九谷焼の再興にかかわっていたことを知り、その足跡をたどるとともに「龔米」の銘が入った作品写真の収集を試みた。

加賀・九谷焼の歴史

古九谷焼

明暦元年（1665）頃、加賀藩の支藩である大聖寺藩主の前田利治が、家臣の後藤才次郎に命じて肥前有田（現・佐賀県有田町）で製陶の修行をさせ、その技術を導入し、陶工を連れて帰って加賀国江沼郡九谷村（現在の石川県江沼郡山中町九谷）で開窯し、田村権左衛門を指導して始めたと伝えられている。

加賀藩（前田家）と佐賀藩（鍋島家）は、米沢藩（上杉家）を介した縁戚関係があったので、焼物の技術導入が可能になった。

「九谷焼」は「九谷村」の名からとったもので、また、この時期に製陶されたものを「古九谷」と呼んでいる。「古九谷」は豪放華麗な色絵磁器で、現在でも高い評価を得ている。

元禄の前半頃、「古九谷」は突然廃窯となってしまう。その原因について、延宝3年（1675）大聖寺藩の凶作による財政難、後藤才次郎などの中心人物の他界、伊万里焼の大量生産による市場競争力の低下、江戸幕府の干渉などが考えられているが、定かでない。

春日山窯

以後110余年加賀には焼物らしいものがなかったが、文化3年（1806）に産業奨励・失業者救済の目的で金沢町年寄・亀田純蔵が京都から陶工・青木木米を召致し、藩営で春日山に開窯したことが今日までの陶業継続のきっかけとなった。

金沢にきた木米は、数々の試焼を行い成果をあげた後一時帰京し、助工の本多貞吉を伴って来沢し新窯を築いて本格的に製陶を始めた。

しかし、文化5年正月の金沢城大火による藩財政の緊縮から民営に切り替えられ木米の待遇条件が悪くなったことや、春日山の産業奨励の目的が作家として腕

を振るおうとしていた木米の志と噛み合わなくなったことが原因で、木米は2年たらずで京都に引き上げてしまった。

その後、地元の松田平四郎が経営を継ぐ事になり、本多貞吉などによって木米の在藩中の作品を模倣して製陶が続けられた。しかし、本多貞吉が若杉窯に移ってから廃れ、文政初年（1818）に廃窯となった。



春日山窯跡（金沢市山の上町）

九谷焼の発展

文化8年（1811）に能美郡若杉村の十村（大庄屋）林八兵衛が本多貞吉を招き若杉窯を開く。それが5年後、藩の郡奉行の支配となり、一大製陶所に発展する。その間藩では京都肥前からの移入を禁じて、生産を保護奨励する。

小松（現・小松市）の花坂山の磁鉄発見と相俟って、肥前調の染付け倣古九谷色絵を産出し、大いに民需に応えるものがあつた。これを契機に新しい窯が次々におこり、九谷焼は再興され、量産の道を歩み始めた。花坂山の陶石は良質で今日までの九谷焼の素地として使用されるに至っている。



青木木米 肖像

<稿本・金沢市史>

明和4年(1767)京都祇園新地縄手町の茶屋「木屋」の長男として生れる。後に家督を継いで代々の名、青木佐兵衛を名乗り、木屋の「木」と幼名の八十八を縮めた「米」で「青木木米」と号する。字は佐平。青来、百六散人、古器観、亭雲楼、九九鱗、中年にして聾になり聾米などと号した。元来器用な人物で何でもこなした。開眼の師は、13歳頃より高芙蓉の感化を受け書画を習い文人的素養を身につける。

青年とよぶ頃、大阪の木村兼葭堂に出入りし多くの文人との交流を重ね一層の教養を高めた。併せて30歳を過ぎた頃、本格的に作陶に励み奥田穎川の影響を受け、のち栗田に開窯。白磁、青磁、染付、赤絵、交跡、南蛮写し等煎茶器を得意とした。

享和元年(1801)35才の時、紀州の徳川治宝侯に招聘され活躍、次いで文化2年栗田青連院宮の御用窯を仰せつけられる。文化3年(1806)40才の時、加賀藩主に招かれ金沢郊外の春日山にて開窯。この時の作品系統を加賀木米と称される。

56歳で長崎に遊び江稼圃に会い、その筆法を学び南画も極め一級秀作の域にあった。清国人朱笠亭の『陶説』を翻訳。絵は晩年の作が多く、奇抜な構図や大胆なタッチ、特に藍と代赭(たいしゃ=黄褐色・赤褐色の顔料)の山水画は新鮮な色彩感覚を示している。代表

作《兎道朝暾(うじちょうとん)図》がある。

化政時代をはさんで12、3年間で多彩に花開いた時期である。煎茶界の偉大な功労者の一人で田能村竹田、頼山陽、篠崎小竹、田中鶴翁との交流は特に有名である。

木米の難聴

木米は、熱い窯の壁に自らの耳を近づけて、轟々たる炎の音を繊細に聞き分け、あわせて炎の色を目で確認していた。この独自の判断法が後年難聴の障害をもたらすことになる。

50代になって耳が遠くなるにつれて、知らず知らずのうちに耳と壁はより近くなる。右耳の難聴がひどく、窯入れのたびに耳たぶが真っ赤に膨れ上がった。

知人との会話に不自由するようになり、後ろから名前を呼んでも反応しなくなったので、58歳ごろから作品の印刻に「聾米」の銘を使用する。

天保4年(1833)木米没、享年67歳。

現在、大谷本廟に「識字陶工木米之墓」がある。

「聾米」の作品(写真)目録

- 1 花瓶
- 2 南蛮急須
- 3 伊羅保写茶碗
- 4 掛け軸 作陶図
- 5 鯛恵比寿の花器・花瓶
- 6 赤絵香炉
- 7 山水楼閣図 湯冷まし
- 8 白釉茶碗
- 9 孔雀釉茶碗
- 10 龍文鉢
- 11 掛け軸 山中談言
- 12 黒釉茶碗
- 13 黒釉茶碗
- 14 織部 茶碗
- 15 茶入れ
- 16 馬場家伝来 時代茶碗
- 17 黄瀬戸茶碗

参考文献

- 「歴史の中のろうあ者」伊藤政雄著
「京焼の名工・青木木米の生涯」杉田博明著
「稿本・金沢市史・工芸編」金沢市